泉穂のいまどき恋愛講座

理解のあるダンナに恵まれたおかげで、私はヒトヅマでありながら、男性と二人きりで食事をする、お茶を飲む、お酒をいただく、という機会が割合多い。

相手はまったくの仕事関係者、単なる男友達、ちょっと気になる未知の人、これから怪しい関係になるかもしれない男性などであるが、楽しいお喋りのひと時を過ごしたあと、いざお店を出るという段になって、私の葛藤の瞬間が訪れるのである。それは、いったいどっちが支払いをするのだろう?という問題が急浮上し、一枚の伝票を巡って生まれる、あの何とも言えない《間》のことである。

正直に告白してしまうけど、仕事の打ち合わせなどで、明らかに先方が支払ってくれる場合と、相手が気心の知れた男友達という場合以外は、あの《間》に耐えられなくなって伝票をつかんでしまうのは、ほぼ確実にこの私なのである。

そして足早にキャッシャーへと突進し、てきぱきと見事な手つきで支払いを済ませてしまう。

若い時からこの傾向は強かったのだが、最近になると、この図式はしっかりと確立されてしまったようだ。

というのは、私はどういう訳か、年下の男のコに惹かれてしまうことが多く(今のダンナもそう)、しかもお金に困っている若者であるケースがほとんどだからだ。

一方、私はというと、いつも派手な洋服を着ているし、燃費の悪い真赤なスポーツカーに乗っているし、仕事も一生懸命やっているので、実際よりも遙かにオカネモチに見えてしまうそうだ。(友達の談)

だから彼らは、とってもオカネモチそうな泉穂さんに少しも遠慮することなく、私からご馳走されるのである。

世の中には、男からオイシイ食事をご馳走してもらって、高価なプレゼントも贈られて、さらにお家まで送ってもらっている女のコも少なくないのだと男友達から聞く度に、むかむかして仕方がない。

なぜなら、そういう男友達だって、可愛い女のコにはさんざん尽くしている筈なのに、私が相手となると、なぜか「今、お金ないんだよなー」などとほざき、「いいよ、いいよ。ここは私が払うから」という申し出を「そう?じゃ、ゴチソーさん」などとあっさり受けるからである。さらに終電のなくなった彼らを私は家まで車で送り届ける羽目になる。

どうしてこうなるのか?

私はいったい誰のために、毎日辛い仕事をしているのか?

そんな疑問がふと頭をよぎる瞬間である。私がオカネモチそうに見えるのが原因だろうか?あの《間》は彼らが、作為的に作り出しているのだろうか?他の女のコたちはいったいどのようにして、上手に男たちに支払わせているのだろうか?

恋愛に関しては偉そうに書いている私だけれど、デートの支払いという問題に関しては、全く若い女のコたちからアドバイスをもらいたいくらいだ。

でも、ま、いっか、と私は思っている。一緒にいて楽しくて、おもしろい話を聞かせてくれる男性なら、あるいは、一緒にいるだけで胸がいっぱいになるくらい素敵な(年下の)男のコなら、喜んで支払おうではないか。「フン。都合よく利用されちゃって、馬鹿な女」と思っている女のコたち、わかってないねー。同じお金を支払うという行為をしても、"ただ貢いでいる女"になる場合もあれば、"気前の良い、ハンサムなおねえさん"になる場合もあるのだ。

それはきっと、支払うことで彼から見返りを期待するかどうかで決まるのだ。

お金を出す代わりに、彼に愛してもらおうという下心がある場合、明らかに"貢ぐ女"になるけれど、この2つをまったく分けて考えることができるなら、(少なくとも年下の男のコたちからは)格好良い、憧れのおねえさんという地位をもらうことができるのである。そして私は、もちろん後者を目指している。

彼らの「泉穂さん、ご馳走さま」という爽やかな言葉とすがすがしい笑顔を前にすると、全財産を投げ出しても構わない、とさえ思ってしまう私である。しかし、中には「ご馳走さま」すら言わない男がいるのは、いったいどういうこと?まったく、奢ってもらって当然という態度ほど腹の立つことはない!

いけないいけない。これじゃ、まるで男のセリフじゃないの、ねぇ。

マンボカーパラダイス

中古車より新車だぞ

世の中いつまでたっても景気は悪いわ、なんかパーッとやりたくても先立つものがないわで、みなさんもきっとしみじみした春をお迎えのことでしょう。世間ではリサイクルブームだとかいって中古品を大切にする風潮で、新社会人向けにさらにお買い得な特別仕様限定車なんて出してくるから、せいぜい見比べてみるといいでしょう。このマンボカーパラダイスを読んで下さって、ようやくマンボ生・新社会人向けに

私のマンボな頭では慣れるのに苦しむほどの数々の電動装備品や、その快適すぎる運転フィーリングが徐々に私のマンボ感をねじ曲げんとしているからです。べつにマンボカーが嫌いになってきたとかいうことでもありません。同じクルマでも、マンボカーと今の新車ではエンジン乗せてタイヤが4つで走っていること以外は、ほとんどベツモノになってしまっていることです。ちょっと前まではク

MARUOKA IZUHO

プロフィール 1965年生まれ。
同志社女子大学卒。(株)電通ブロックス勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかFMラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に「ありふれた無邪気が罪になる」(PHP研究所)、「キスまで、待てない」(大和書房)など。

着倒れ京都人に送る。ササイな情報 ⑫

京都に住んでいて良かった、などと思うことは滅多にないのだけれど、夜に街に出ていくと、京都にしかない時間を感じることがある。

子供の頃はその前を歩いて通るだけで興奮した九条の映画館「みなみ会館」のレイトショーで、「スィート・スィートバック」（米71年）をやるというので、見に行く。メルヴィン・ヴァン・ピープルス監督主演のブラックムービーの原点で、これまでサントラのレコードなどは出ていたが、その映画自体は日本でお目にかかることがなかった。音楽は初期のEW&F。「シャフト」や「スーパーフライ」「ハーダーゼイカム」スパイク・リーの一連の作品もこの作品を抜きにしては語れない。この数年の黒人ブーム、70sブームでさぞかし客も多いと思ったが、見に来ているのは20人足らず。ピープルズのファッションが凄い。パリのデザイナー、マルティーヌ・シットボンの原形が走り回る。帰りは雪に見舞われたけれど、ゆっくり見られて、京都に住んでいて良かった。

70年代の京都、ブルースブーム全盛時の神様、塩次伸次（ウエストロードブルースバンド）と服田洋一郎（ブルースハウスBB、ブレイクダウン）のギターデュオを、70年代の京都の遺産のライブハウスへ連チャンで見に行く。二人とも今は東京在住、このライブは東京では予定がないという。初日の礫礫でパリの小屋「ニューモーニング」を思い出し、拾得では高校生に戻ってしまった。伸ちゃんのファッションがピープルズとダブる。服ちゃんのギターは90年代を飛び越えている。去年のブレイクダウンはソールドアウトで見られなかったのに、今回、客の数は決して多くない。アシッドジャズやモンドグロッソのファンはなぜここにいないのだろう。20年という時間は、そんなにも長い、と大雪で来ないタクシーを待ちながら考える。

でも、1200年よりずっと短い。

次の週、大阪へデ・ラ・ソウルを見に行く。ラップ界に70sのポップグラフィックスを最初に持ち込んだ、ウエストコーストのガキ達。見に来ている男の子たちの格好が全部同じに見える。10代らしき女の子がジャン・コロナのジャケットにズリー・ベットのニットを合わせている。みんなお洒落なんだけど、コンサート自体は全然盛り上がらない。ダラダラしたまま会場の明りがつき、みんなお行儀よく帰る。

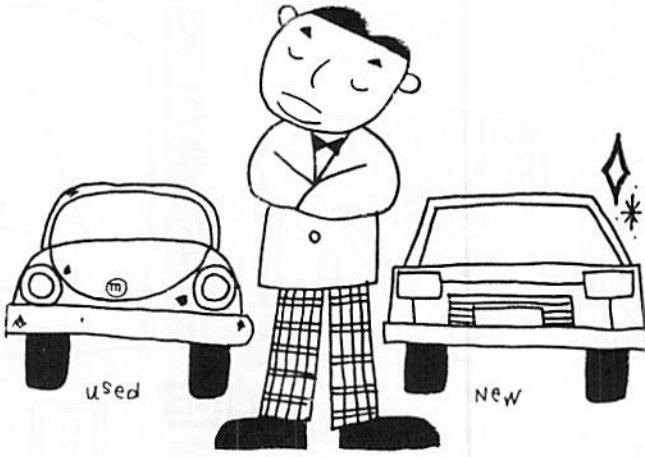
70年代ブームはファッションだけのことらしい。あの時代を多少なりともかじってしまった世代は、百万遍あたりでくだをまくしかないのかもしれない。「東京より、京都はずっといいよ」という声だけを頼りにして。

「音楽や映画の話なんてどうでもいい」「全然、ファッションの情報がない」と怒られると困るので、一つだけ新しい情報。パリの百貨店「ギャラリー・ラファイエット」が、パリの下町スーパー「タチ」のオリジナル商品を売るコーナーを設置した。前にこのコラムでズリー・ベットの話を書いたときにタチの紹介はした。アライアがショッピングバッグのデザインをした店である。

そのオリジナル商品は昨シーズン、パリコレで圧倒的な評価を得た「GR816」のデザイナーのジル・ロジェとクロード・サバがデザインしている商品で、とりあえず安い。シャツやパンツが2000円程度。当然のごとく、売り場は人で溢れているという。日本では某大手量販店が扱うという噂が業界では流れている。心待ちにしている。

プロフィール 1959年京都生まれ。流行通信社・WWDジャパン編集部デスク。東京中心のファッション情報のなかで関西に留まり、10年以上にわたり世界の服飾産業を見続けている。91年より大阪コレクションの選考委員として、海外、新人のデザイナーのショーもサポート。

NODA TATSUYA



イラスト：佐藤アモール陽子

PARADISE YAMAMOTO

潮が広がってきていますが、私もそれには大賛成です。私の場合だいたい本業の音楽にしたって言ってみれば中古品再生業みたいなもんで、べつに目新しいことやっているわけではありません。タンスの奥でほこりかぶって何年も人目につかなかったマンボや、チャチャチャを引っぱり出してきては、ひとつひとつピカピカに磨いて店頭に並べているようなもんです。自分のことながら言い過ぎのような気もしますがほとんどこれはリサイクル事業と言っていいでしょう。

マンボカーの概念では、そのほとんどが中古車であったり、ボンコツ車だったりするわけですが、今年にはいって新車を買ってしまってマンボカーと新車を交互に乗るようになった私は、今複雑な思いにかられています。新車の性能があまりにも良すぎるというか、ラウンとか、グロリアにしか装備されていなかった機能が今や軽自動車にまで広がって、外観だってマークⅡとカローラとどこが違うんだっていうデザインなんだから、選ぶときにどっちにするかあとは値段だけでしょう。クルマなんかにはこだわり全然ないよっていう人でも、フルオートエアコン＋パワーステアリング＋電動リモコンドアミラー＋CDカセットにエアースポイラーとアルミホイールがセットになってナナキュッパッとか云われたら安いと思うでしょう。中途ハンパな中古車買うよりも今なら断然新車の方がイイぞ。それになんで新車のクルマだけが消費税4・5%なの？って疑問に思っていた人も多いはず。でもこの4月からは、他のモノと同様3%に下がることが決まったし、各メーカーはフレッシュマンセールとかいって新入学なクルマに目覚めてきた人には気の毒だけど、高いお金払って買うものなんだから、今買うんだったらやっぱり新車じゃないのと無責任な私。この際、マンボカーは2台目にしなさい。

【プロフィール】 元東京パノラママンボボーイズのリーダー。富士重工業デザインセンターで、カーデザイナーとしても活躍していた。初代レガシィツーリングワゴン、アルシオーネSVXなどのデザインを手掛ける。現在CS衛星放送スペースシャワーチャンネルの毎週金曜日のBUM－TVで、パラダイス山元のマンボカーパラダイスを生放送中！4月から始まるTBS系の新番組でもマンボなコーナーに出演しているから土曜の夜7時はTVの前に集合。マンボ画伯ソリマチアキラといっしょに東京ラテンムードデラックスでも活躍中。DJパラダイス山元ついに4月ごろ京都上洛予定！